

三加和町文化財調査報告 第4集

田中城跡

IV

—空堀跡調査の概要—

1990

三加和町教育委員会

三加和町文化財調査報告 第4集

田中城跡

Ⅳ

—空堀跡調査の概要—

1990

三加和町教育委員会

序

国・県の補助を受けて続けています田中城跡の調査も、本年で4年目を迎えました。昨年までに、主郭部とその周囲に巡らされた曲輪の一部の調査を終え、今年は空堀跡の調査を行ないました。

田中城は築城の際の土木工事のすばらしさが評価されて、県の指定を受けている中世城ですが、調査の結果、幅約10m・深さ約5mにもおよぶ大規模な空堀が姿を現わし、さらにその評価を高めることになりました。

この報告書が、文化財に対する理解を深め、研究・保護のために活用されれば幸いです。

なお、発掘調査に際しましては、県文化課ならびに専門調査員の先生方のご指導・ご助言を賜わり、また、地元の方々の多大のご協力も受けました。ここに心から厚くお礼申し上げます。

また、今年度は調査と並行して、昭和61・62年度で調査を終えた主郭部の整備も終え、調査と保護という両面から今後も田中城を見つめていきたいと思っています。皆様の尚一層のご協力をお願いいたします。

平成2年3月31日

三加和町教育長 蒲池 龍一郎

例 言

1. 本書は熊本県玉名郡三加和町が「田中城総合整備計画」の一環として、平成元年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、国庫・県費補助事業として三加和町教育委員会が実施し、黒田裕司がその任にあたった。
3. 遺物及び遺構の実測・製図は黒田が、拓本は笠間いつ子が行なった。
4. 写真撮影は黒田が行なった。
5. 田中城西側水田の圃場整備に先立って、県文化課が行なった試掘調査の結果について、松本健郎熊本県文化課文化財調査第1係長に原稿をいただいた。また、空堀南壁の土層断面の剥ぎ取りは、木下洋介宇土市教育委員会文化振興係主事の協力を得た。
6. 調査に関しては、専門調査員のご教示を得た。
7. 本書で使用した遺構の略記号は次のとおりである。

SK—土壌、SX—不明遺構

A—B・C—D・E—Fは、断面実測の基準。
8. 出土遺物及び空堀南壁断面を剥ぎ取ったものは三加和町教育委員会で保管している。
9. 題字は、山下保幸氏による。
10. 本書の執筆・編集は黒田が担当した。

本文目次

第Ⅰ章 序 説	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査経過	2
第Ⅱ章 調査の成果	5
第1節 調査の概要	5
第2節 遺構と遺物	7
(1) 空堀	7
① 北側断面について	7
② 南側断面について	14
(2) 土壇	14
① 1号土壇	14
② 2号土壇	14
③ 3号土壇	14
(3) 出土遺物	18
第Ⅲ章 まとめ	19
付 論 県営園場整備事業（春富地区）の試掘調査概要	
熊本県文化課文化財調査第1係長 松本 健郎	20

挿 図 目 次

第1図 空堀跡測量図	6
第2図 空堀跡北側断面実測図	9
第3図 空堀跡南側断面実測図	11
第4図 3号土壇断面実測図	15
第5図 高城跡Ⅳ郭北側斜面遺構実測図	16
第6図 高城跡Ⅳ郭北側斜面土層断面図	17
第7図 出土遺物実測図	18
第8図 田中城跡と和仁川の河道	21
第9図 田中城全体図	22

表 目 次

第1表	空堀北側断面土色観察表	8
第2表	空堀南側断面土色観察表	13

写真図版目次

図版1	(1)空堀跡南側断面	(2)空堀跡北側断面
図版2	(1)調査前の状況(南より)	(2)発掘作業風景
	(3)空堀跡西側状況	(4)空堀跡西側状況
	(5)土壌検出状況	(6)土壌発掘後の状況
	(7)3号土壌	(8)不明遺構
図版3	(1)堀底検出状況(南より)	(2)堀底より南壁(北より)
	(3)出土土器	(4)鉄砲玉
	(5)南壁土層剥ぎ取り状況(薬品塗り)	
	(6)南壁土層剥ぎ取り状況(ガーゼ張り)	
	(7)南壁土層剥ぎ取り状況	
	(8)南壁土層剥ぎ取り状況(切り取り)	

第Ⅰ章 序 説

第1節 調査に至る経過

田中城周辺の環境整備及び史跡公園化を目指し、国・県の補助を受け、昭和61年度から調査をはじめ、昭和61・62年度で主郭部分の調査を実施し、掘立柱建物14棟・溝遺構・土壇・竪穴住居跡（弥生時代・後期）などを検出した。そして、土師質土器・播鉢・火舎・青磁・染付碗・土鍾・備前焼水甕などの遺物が出土した。また、昭和63年度は主郭の下方に巡らされた曲輪のうち、東側の約700㎡の調査を行なった。検出した遺構の数はあまり多くなかったが、ほとんどの遺構にガチガチに固まった焼土が厚く堆積しており、なかには小鍛冶でも行なっていたのではないと思われる土壇も検出された。遺物としては、土師質土器・播鉢・火舎・備前焼水甕などの日常生活用品のほか、青磁・白磁・染付碗などの輸入陶磁器類、鍔の小札・兜の前立（一部金箔残留）・刀子・鋌・鉄砲玉（鉛製）などの金属製品、硯・砥石・石臼などの石製品、猿の造り物・土鍾などの土製品などバラエティーにとんだものが多数出土した。

4年目を迎えた今年度は、昨年までの平面的な調査とは趣を異にした空堀という立体感を伴う部分の調査を行なうことになった。空堀は主郭部を取り巻くように、西側を除く三方に約300m巡らされているが、竪堀及び対岸に残されている物見やぐらと呼ばれている部分との関わりをみるという点から、今回の調査地を選んだ。

第2節 調査組織

- 調査主体 三加和町教育委員会
調査責任者 蒲池龍一郎（三加和町教育長）
調査事務 牛島 茂生（社会教育課々長）
藤木 住人（社会教育課々長補佐）
高木洋一郎（社会教育課主事）
調査員 黒田 裕司（社会教育課主事）
専門調査員 石井 進（東京大学文学部教授）
大三輪龍彦（鶴見大学文学部教授）
原口 長之（熊本県文化財保護審議員）
田辺 哲夫（日本考古学協会員）
工藤 敬一（熊本大学文学部教授）
北野 隆（熊本大学工学部教授）

阿蘇品保夫（熊本県立美術館主幹）

大田 幸博（熊本県文化課文化財保護主事）

発掘作業員 福原 房子・鶴 浅代・鶴 加代子・鶴 サカエ・福原 忍・

福原 鮎子・北原美和子（測量・実測）

発掘協力者 江崎 正（熊本県文化課々長）・隈 昭志（熊本県文化課審議員）・

桑原 憲彰（熊本県文化課文化財調査第2係長）・西澤 八朗（熊本県文

化課参事）・中村幸史郎（山鹿市立博物館学芸員）・木下 洋介（宇土市

教育委員会文化振興係主事）・坂本 重義（南関町古小代焼窯跡発掘調査

員）・鶴 正巳（地権者）・田中城保存整備協議会

第3節 調査経過

8月1日 発掘調査開始。

重機による表土剥ぎ。

8月3日～ 人力による表土剥ぎ。

整地面と思われる面でとめて、清掃写真。

8月21日～ 試掘トレンチをいれて、下部の状態の確認作業。

約3m掘り下げ、堀の壁面と思われる凝灰岩を確認。しかし、底面は確認できず。

8月22日 南関町古小代焼窯跡発掘調査団見学（坂本氏 他7名）。

8月24日 鹿本郡市退職教頭会見学（16名）。

8月25日 鉄砲玉出土。

8月29日 工藤敬一熊本大学文学部教授見学。

雨水が約1.5mもたまってきたため、今後の水対策を考える必要が出てきた。

9月4日～ 遺構発掘。

雨が続き約2.5mも水がたまっていた痕跡がみられた。

9月8日 2個目の鉄砲玉が出土。しかし、他の遺物はほとんどみられず。

約3mまで掘り下げる。調査区があまり広くないためベルトコンベアーが使えず、一輪車での排土のため、かなりの重労働になり作業員2名がリタイア。

9月12日 郷土史講座受講生見学（9名）。

9月18日 約5mまで掘り下げたが、まだ堀底の確認にはいならず。

もう一輪車での押し上げも無理なので、バックフォアをいれて排土をする

ことにする。

- 9月25日 雨が続いていましたが、ようやく天気も回復し作業がはかどりだす。
- 9月26日 約5mの深さから3個目の鉄砲玉が出土。
- 9月27日 ようやく堀底を確認。現地表面から約6m。
- 9月28日 光岡 明 熊本近代文学館々長見学。
- 10月5日 鹿児島県日置郡東市来町農業委員会見学（16名）。
共同通信社取材。
- 10月16日 石井 進 東京大学教授・原口長之・田辺哲夫・高濱幸敏地名研究会事務局長・大田幸博各氏見学。
- 10月17日 南関町古小代焼窯跡発掘調査団見学（坂本氏 他6名）。
玉名事務所見学（3名）。
- 10月25日 遺構写真撮影。
測量用の杭打ちをして平板測量（1/50）。
- 10月27日 熊本日日新聞社取材。
- 11月3日 玉東町歴史探訪会見学（49名）。
- 11月8日 北側断面実測（1/20）。
- 11月13日 隈 昭志熊本県文化課審議員・富田絃一熊本市立博物館学芸員見学。
当初予定していた部分の調査を終えたが、できれば現況のまま保存できないかという意見が多く出されたので、堀の全容を明らかにするため主郭側の立ち上がりを確認することにする。
- 11月20日 TKU取材。
- 11月21日 熊本市立博物館友の会見学（40名）。
- 11月25日 天草東高校教師見学（8名）。
- 11月28日 球磨郡山江村の高城跡で確認され、タコ壺状土壇と名付けられた遺構と類似の遺構を確認。
- 11月29日 土壇の清掃・写真撮影。
山鹿市城村城発掘調査団見学（中村氏 他8名）。
- 12月1日～ 土壇発掘。
- 12月4日 三加和町議会議員全員協議会見学。
菊鹿町教育委員会見学（4名）。
- 12月12日 現地説明会（70名）。
- 12月14日 南関町文化財懇話会見学（25名）。

平成2年

- 1月11日 山鹿市陶芸教室生見学（17名）。
- 1月17日～ 写真撮影のための全体清掃を始める。
しかし、雨・雪が続きなかなか写真撮影ができない。
- 1月26日 全体清掃・写真撮影。
- 2月7日 肥後国衆一揆顕彰会議見学（33名）。
- 2月13日～ 平板測量（1/50）。
山鹿市立博物館の厚意により測量・実測補助員として北原さんに手伝ってもらうことになる。
今月に入っても雨が多く、なかなか作業が進まない。空堀には水がたまってきたのだが、雨が続くので水抜きもできず、次第に壁面が浸食されており早く埋め戻さなくては、崩壊の恐れも出てきた。
- 2月16日～ 南側断面実測（1/20）。
以前、崩壊した部分がかなり凹んで法面の傾斜がきついため、実測するのに困難を極め、時間がかかりそうだ。
- 2月16日 島田真裕 島田美術館々長見学。
- 2月23日 松村恵司文化庁技官・桑原憲彰熊本県文化課第2係長見学。
南側土層断面の剥ぎ取りを、宇土市教育委員会の木下洋介主事に依頼していたが、数日雨が続き現場の状況がおもしろくないため延期。
- 2月24日 土層剥ぎ取り準備のため断面をほぼ垂直におとす。
- 2月25日 曇りとした天気だったが無事土層剥ぎ取りを終える。
- 2月27日 鹿兒島県曾於郡輝北町議会議員・教育委員会見学（7名）。
- 3月2日 ようやく土層断面・土色入れを終える。
- 3月23日 森山恒雄熊本大学文学部教授見学。
- 3月26日 菊池市ふるさと学級見学（43名）。
玉東中学校教諭見学（8名）。
- 3月27日 調査区の埋め戻し終了。
- 3月28日 熊本市鈴史会見学（鈴木 喬氏 他約 100名）。
- 3月29日 石井 進東京大学文学部教授・大三輪龍彦鶴見大学教授来町。
- 3月30日 活力と個性ある地域づくりシンポジウム
『豊臣秀吉軍勢と田中城攻防戦』開催（約200名参加）。

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査の概要

主郭を取り巻くように作られた曲輪の西側は、阿蘇溶結凝灰岩の断崖絶壁である。空堀は、この西側を除く三方に巡らされており、総延長は約 300m にもおよび、現況での主郭との比高差は約10m を測る。この空堀を作ることにより対岸の三ヶ所に物見やぐらと思われ高台を独立させている。物見やぐらとの比高差は5.70～6.70m である。

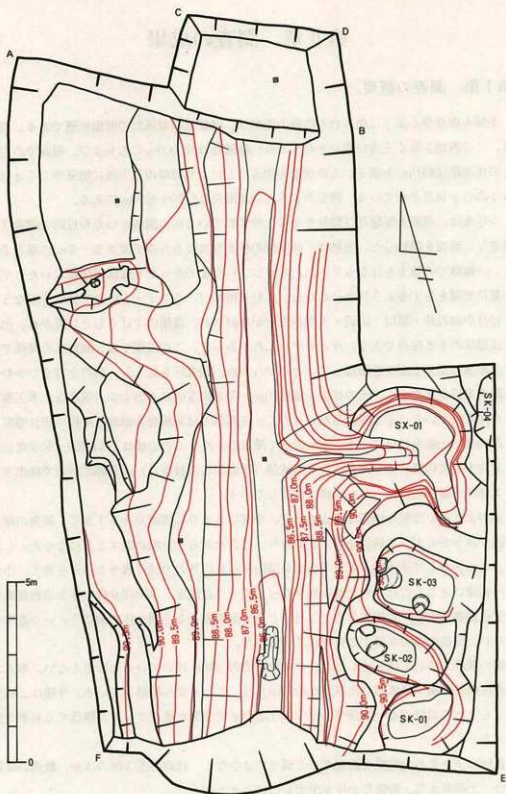
今年度は、空堀と竪堀及び物見やぐらと呼ばれている所の関連をつかむ目的で調査区を設定し、調査を開始した。当初は、竪堀側の埋まり具合からみて深さ2～3m の堀と予想し、一輪車で排土を行っていた。しかし、いつまでたっても底部の確認にいたらず、作業に無理を生ずるようになったため、止むを得ずバックフォをいれて排土を行なう。

10月中旬石井・原口・田辺・大田各先生が来跡され、遺構のすばらしさに驚かれ、出来れば現状のまま保存できないかとの申し入れがあった。この段階では、調査区の関係でまだ主郭側の立ち上がりを確認していなかったため、調査区を拡大し、堀の全容をつかむよう調査方針を変更する。その結果、幅約10m、深さ約5m にもおよぶ大規模な土木工事により作られていることを確認した。さらに、主郭側では凝灰岩を幅約3m 程平坦に整形しその部分に土壌を設けていることも併せて確認された。この土壌は、昭和59～60年度にかけて熊本県文化課により調査された高城跡（球磨郡山江村所在）のⅣ郭北斜面で検出されタコ壺状土壌と名付けられた遺構に類似している。

このようにして堀の概要はつかめたが、今度はあまりに規模が大きすぎて、最良の保存方法がみつからず、危険防止のこともあり、残念ながら一旦埋め戻すことになった。しかし、なんとかして立体感あふれる空堀を図面・写真以外の方法で残せないかと考え、中央の一番深いところだけでも土層を剥ぎ取って残そうと決定。木下洋介氏（宇土市教育委員会文化振興係主事）に相談したところ、どうせ剥ぎ取るなら堀全体を剥こうという返事をもらい、同氏の協力を得て2月25日に実施した。

堀の規模については先述したが、この状態で約 300m 続いているとは思えない。事実、調査区の北と南では底部の比高差が約80cmあり、北から南へ傾斜している。今後は、物見やぐらなどの対岸がない部分で、どのような形状で空堀が延びているか確認する必要がある。出てきた。

遺物は、かなり大規模な調査だった割には少なく、鉄砲の玉3個のほか、数点の播鉢火舎・土師質土器・陶磁器小片が出土したにとどまった。



第1図 空堀跡測量図

第2節 遺構と遺物

(1) 空堀 (第1図)

主郭を形成している丘陵の裾部に約300m巡らされており、現状は栗山・杉山および畑地である。比高差は主郭部と約10m、対岸の三ヶ所に残る物見やぐらと呼ばれている高台とは5.7～6.7mあり、このままでも充分堀としての機能は果たしていたものと思われる。空堀を観察してみると、約2.5m下がった地点が平坦になり、ステップ状を呈しているため、このあたりが底部になるのではないかと考え、当初は幅約7～9m、長さ約20mの調査区を設けて調査を開始。物見やぐら側では、立ち上がりはすぐに確認できたが、主郭側は調査区外まで延びていて確認できなかった。しかし、後日主郭側の調査区を4×11mの広さで拡張し、主郭側の立ち上がりも確認。空堀の規模は幅9.42m、深さは調査区の北側で4.42m、南側で4.63mを測る。主郭側では約3mの平坦面を設け、そこから急激に落ち込んでおり、この平坦面には3基の土壇を設けている。物見やぐら側では底部から約2.65m上方に約16cmと片足幅ぐらの、非常に狭い犬走り的なものがみられる。主郭側でもそれらしき痕跡は残っているが、崩壊したのかははっきりしない。堀の断面形は、調査区の南側は底部幅約80cmでV字形に近いが、北側は約1.1mあり逆台形を呈する。現在の地表面からの深さは南北で21cmの差であるが、標高差でいくと約80cmとなり北から南へ傾斜している。主軸の傾きはN14°Eである。

なお、北側断面近くでは主郭側の調査区を拡張しなかったため、立ち上がりの確認にはいたっていない。

① 北側断面について (第2図)

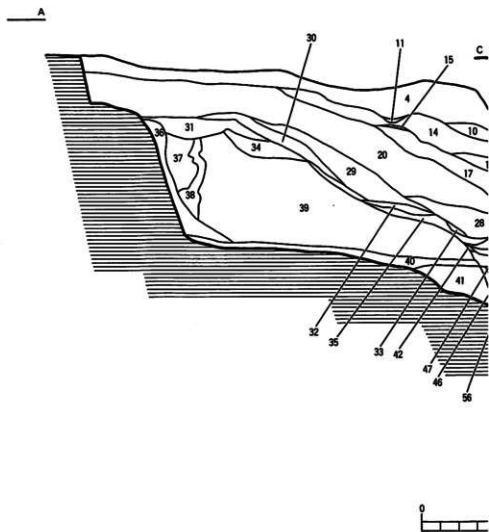
発掘中に崩壊の危機が生じたため、止むを得ず段掘りをする事になり、少々見にくくなってしまった。また、主郭側へ調査区を拡張しなかったため、立ち上がりは底部から2.25mまでしか確認できていない。

物見やぐら側は、地表から約50cmの深さから約1.35m落ち込み、そこから約3.5mほぼ平坦面を設けてさらに急激に約2.2m落ち込み底部にいたる。

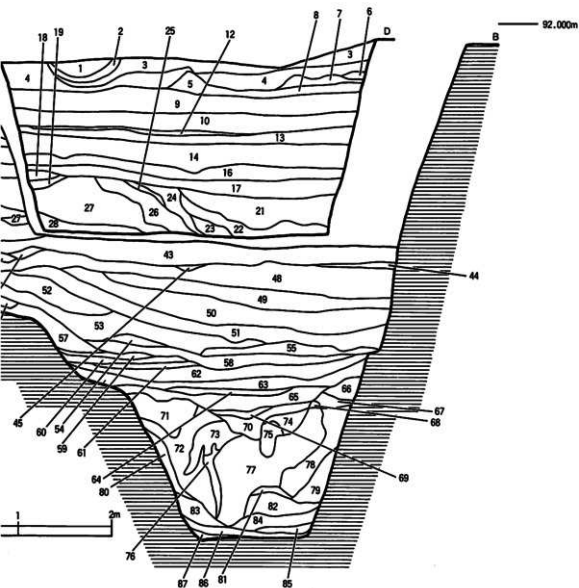
堀の埋まり具合は、底部近く約10cmは自然に埋まったものと思われるが、その上約1.8mは粘性の強い土で、明らかに人為的に投げ入れて埋めたとと思われる。その上部は物見やぐら側から主郭部に向かって自然に埋まったような堆積状態を示し、断面C-Dでは1～17は再度人為的に埋められたように思われる。また、40は灰色土・黄白色土の層が互層をなしており、非常に粒子が細かく粘性の強い層で、水がたまったときにできる土のように思われ、一時この面が表面に出ていた時期があったように思われる。

1	暗褐色土+小礫(硬)	45	暗褐色土+小礫(少・硬)
2	灰白色土+砂(硬)	46	灰褐色土+褐色土粒・凝灰岩小片(少・硬)
3	暗褐色土+砂・焼土粒(硬)	47	灰白色土+褐色土が互層(強い粘性)
4	暗褐色土+小礫・凝灰岩片(硬)	48	暗褐色土+小礫・橙色土(硬)
5	暗褐色土+明褐色土・灰白色土(硬)	49	暗褐色土+小礫・橙色土(硬)
6	褐色土+砂(やや粘性)	50	暗褐色土+小礫・橙色土(硬)
7	灰黒色土(凝灰岩の土状化でサクサク)	51	暗褐色土+小礫・橙色土・白色土(硬)
8	淡暗褐色土+橙色土・砂・凝灰岩片(多・硬)	52	暗褐色土+赤褐色土+灰白色土+凝灰岩片(少・軟)
9	暗褐色土+凝灰岩片(多・硬)	53	濃灰褐色土+赤褐色土+灰白色土(サクサク)
10	暗褐色土	54	灰褐色土+赤褐色土+灰白色土+凝灰岩片(少・軟)
11	明褐色土+小礫(少・やや粘性)	55	灰白色土+橙色土・凝灰岩片(少・やや粘性)
12	灰褐色土+砂・白色土(硬)	56	赤褐色土+小礫(少・強い粘性)
13	暗褐色土+砂・橙色土粒(硬)	57	暗褐色土+灰白色粘土+橙色土+凝灰岩片(少・サクサク)
14	暗褐色土+凝灰岩片(多・硬)	58	暗褐色土+灰褐色土+橙色土(少・硬)
15	暗褐色土+灰白色土・小礫(少・やや粘性)	59	暗褐色土(強い粘性)
16	暗褐色土+凝灰岩片・砂	60	黄白色土(強い粘性)
17	暗褐色土+凝灰岩片・砂(やや白っぽい)	61	灰褐色土+褐色土粒(強い粘性)
18	灰白色土+砂(サクサク)	62	濃灰褐色土+凝灰岩片・橙色土粒(少・軟)
19	淡灰色土(サクサク)	63	灰白色土+赤褐色土・橙色土塊・小礫(少・やや粘性)
20	暗褐色土+小礫・凝灰岩片・橙色土(多・硬)	64	淡灰褐色土+凝灰岩片・灰白色粘土(少・やや粘性)
21	明褐色土+小礫・凝灰岩片(強い粘性)	65	暗褐色土+灰褐色土・橙色土・凝灰岩片(少・やや粘性)
22	灰白色土+小礫・凝灰岩片(強い粘性)	66	灰黒色土(サクサク)
23	淡明褐色土+小礫・凝灰岩片(強い粘性)	67	灰白色土+凝灰岩片・小礫・橙色土(粘性)
24	淡灰色土(サクサク)	68	明褐色土+砂(粘性)
25	明褐色土+小礫(やや粘性)	69	明褐色土+灰白色土(強い粘性)
26	淡灰色土+凝灰岩片・黄色土(サクサク)	70	灰褐色土+白色粘土・小礫・黄色土(少・粘性)
27	白色土+小礫・砂・凝灰岩片(粘性)	71	灰白色土+小礫・凝灰岩片(多・粘性)
28	灰褐色土+砂・小礫(硬)	72	灰白色土+小礫・凝灰岩片(多・粘性)
29	暗褐色土(白っぽい)+小礫・凝灰岩片・橙色土(多・硬)	73	焦茶色土+黄色土(極めて強い粘性)
30	暗褐色土+小礫・凝灰岩片(少・硬)	74	明褐色土(極めて強い粘性)
31	暗褐色土+灰白色粘土(硬)	75	焦茶色土+赤褐色土+灰白色土+橙色土(極めて強い粘性)
32	暗褐色土+灰白色土・黄褐色土・凝灰岩片(少・硬)	76	淡黄白色土+灰白色土・黄色土粒(少・極めて強い粘性)
33	暗褐色土(硬)	77	明褐色土+小礫(少・極めて強い粘性)
34	淡灰褐色土+淡黄褐色土(砂質でザラザラ)	78	褐色がかった灰白色土+小礫(少・やや粘性)
35	暗褐色土+小礫(少・硬)	79	灰白色土+小礫・黄色土粒(少・やや粘性)
36	灰白色土+小礫・凝灰岩小片(やや粘性)	80	灰白色土+凝灰岩片・黄色土粒(少・やや粘性)
37	黄白色土+小礫・凝灰岩小片(やや粘性)	81	灰白色土+橙色土粒(少・やや粘性)
38	褐色土(強い粘性・崩壊か?)	82	淡灰色土+凝灰岩片・灰白色粘土(やや粘性)
39	灰白色土+凝灰岩片・小礫・黄色土・白色土(多・軟)	83	褐色がかった灰白色土+凝灰岩片(やや粘性)
40	灰色土と黄白色土が互層(極めて強い粘性)	84	黄白色土+黄色土・橙色土(強い粘性)
41	黄褐色土+小礫・凝灰岩片・黄色土(やや粘性)	85	濃灰黒色土(サクサク)
42	暗褐色土+橙色土粒(少・硬)	86	濃灰褐色土+黄色土粒(極めて強い粘性)
43	暗褐色土+小礫・橙色土(硬)	87	灰褐色土(やや白味をおびる・極めて強い粘性)
44	灰白色土(極めて強い粘性)		

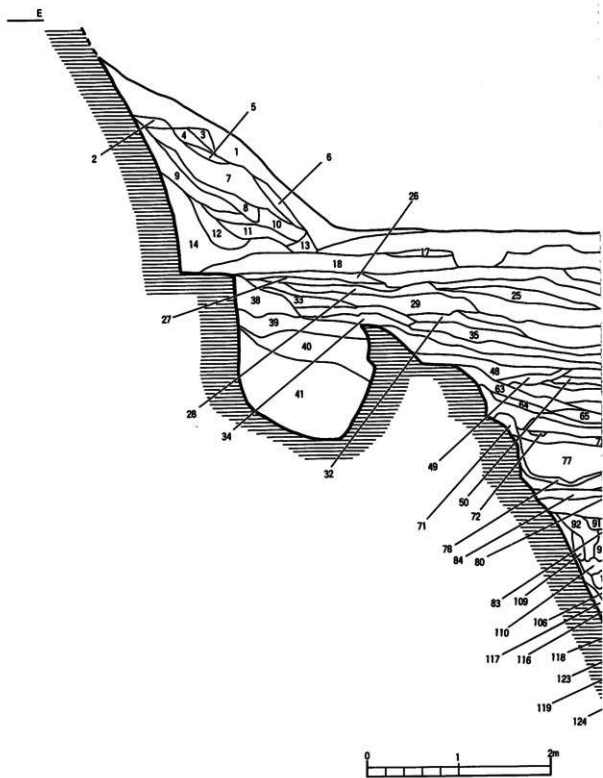
第1表 空堀北側断面土色観察表



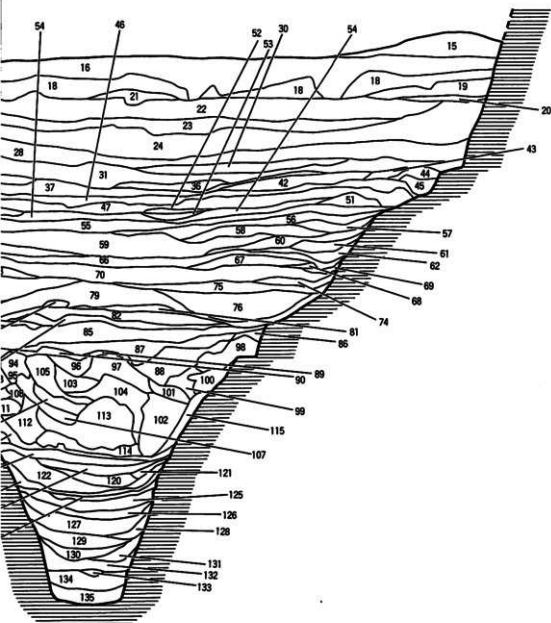
第2図 空堀北



断面实测图



第3圖 空堀



剖面断面实测图

[illegible]

② 南側断面について (第3図)

主郭側は急峻な凝灰岩の壁面がみられ、約3m平坦面を設けたあと、急激に落ち込んでいる。物見やぐら側は現地表面から約1.2m下がったところから堀になると思われ、だからと約3.2mの深さまで続き、幅約16cmの犬走り的な平場を設けたあと再び急激に落ち込み、底部へといたる。堀幅9.35m、深さ4.63mを測る。

堀の埋まり具合は、1~14は主郭斜面を流れた土が自然に堆積し、そこから下は土層がほぼ水平に入っており、人為的に埋められたものと思われる。大きく分けると6層に分けられ、粘土質の土と岩盤の凝灰岩が土状化してサクサクとなったものが交互に堆積している。底部近くは粘質土が約40cmたまり、その上約1.3mは凝灰岩が土状化したものを含むため、色調も灰色がかっており、サクサクしている。そして、北側断面でも観察できる、かなり乱れた粘土層が約1m続き、中央に凝灰岩が土状化したものををはさみ、やや粘質をもつ層がその上に約90cm堆積している。さらに、凝灰岩が土状化したものが薄く互層をなして約1.2m続く。一応ここまでが空堀の埋土で、その上に約1m硬くてよくしまった土が堆積している。

(2) 土 壌

主郭側の斜面下から4基の土壌が検出された。SK-04は調査区外に延びていたため、他の3基の調査を行なった。

① 1号土壌 (SK-01)

調査区外にもう少し延びているため、長径2.8m+ α 、短径1.9m+ α 、最深部0.88mを測り、楕円形で長軸をS85°Wにとる。空堀側は立ち上がりが急で主郭側に向かってグラグラとのぼっていく。上縁近くはオーバーハングしている。

埋土は岩盤の凝灰岩を一度掘り上げたあと土状化したもので、風化してボロボロになった凝灰岩片を多量に含み、上にのっただけで沈むほど軟らかい。

② 2号土壌 (SK-02)

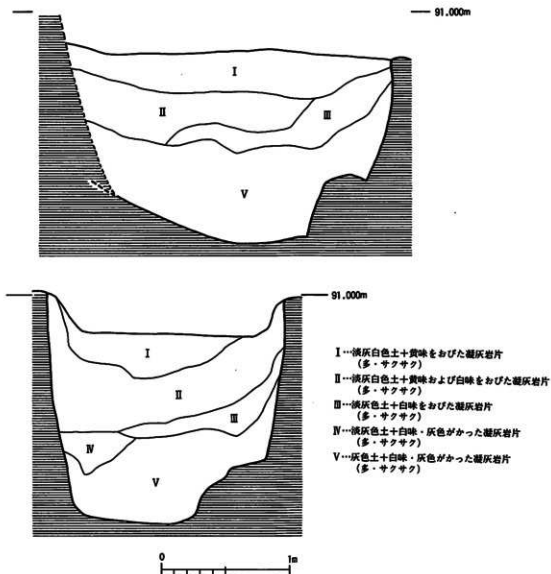
長軸をN49°Wにとり、長径2.9m+ α 、短径約1.5mの楕円形で最深部約1.7mを測る。空堀側は崩壊しているため、現況では上縁がかなり下がっている。SK-01同様、上縁近くはオーバーハングしており、埋土も同じように凝灰岩の土状化したもので非常に軟らかい。また、空堀側には大きな凝灰岩が2個配したように残っている。

③ 3号土壌 (SK-03) (第4図)

長軸をN59°Wにとり、長径2.88m+ α 、短径約1.9m、最深部約1.83mを測り、隅丸方形プランを呈する。他の2基と同様に上縁はオーバーハングし、埋土も凝灰岩が土状化したもので非常に軟らかい。空堀側には階段状に2個の凝灰岩を残し、また中央南壁にも凝灰岩が1個見られる。

このような土壌の類似遺構としては、熊本県文化課が昭和59年度に調査を行なった高城跡¹¹（球磨郡山江村）で検出されたものがあげられる。Ⅳ郭の北（第5・6図）および北東側斜面から各々12基、計24基が検出されており、タコ壺状土壌と名付けられている。規模は2.0～4.0×1.3～2.7m、深さ1.0～2.8mと田中城のものよりやや大きめであり、縁に土壘状の高まりを有するものがあるということで性格については異なるのかもしれない。

また、天草氏の本拠地である河内浦城（天草郡河浦町）の調査でも、帯曲輪の外にタコ壺状遺構が検出されたとの報道がある¹²。最近、あちこちで中世城の発掘が行われるようになっており、今後もこのての遺構の検出が増加する可能性もある。現在のところ、玉名郡

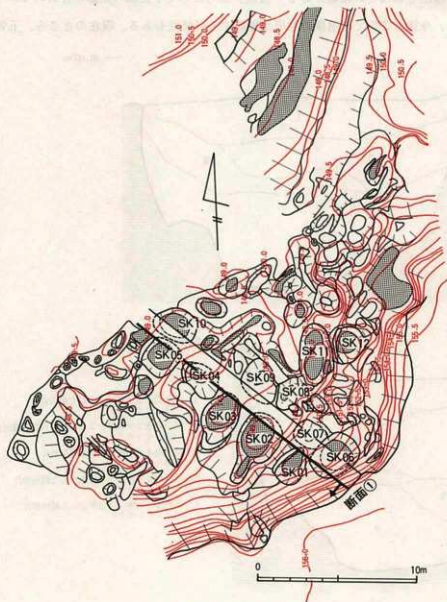


第4図 3号土壘 (SK-03) 断面実測図 (上: 北側、下: 西側)

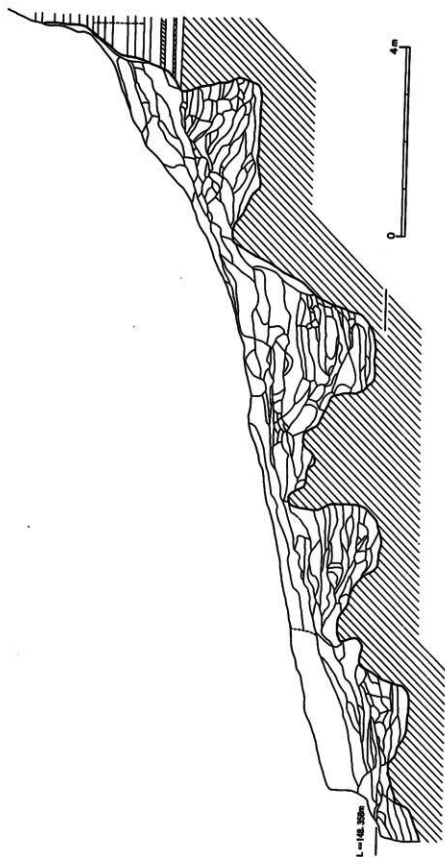
三加和町・天草郡河浦町・球磨郡山江村と県内バラバラの地域で検出されており、今後の調査の状況によっては中世城築城の際のひとつのパターンといえるようになるのかもしれない。

註1 「高城跡」 熊本県教育委員会 1988

註2 平成2年2月14日付 熊本日日新聞



第5図 高城跡Ⅳ部北側斜面遺構実測図
「高城跡」熊本県教育委員会より



第6圖 高城嶺Ⅳ部北側斜面土層断面図
 「高城嶺」熊本県教育委員会より

(3) 出土遺物 (第7図)

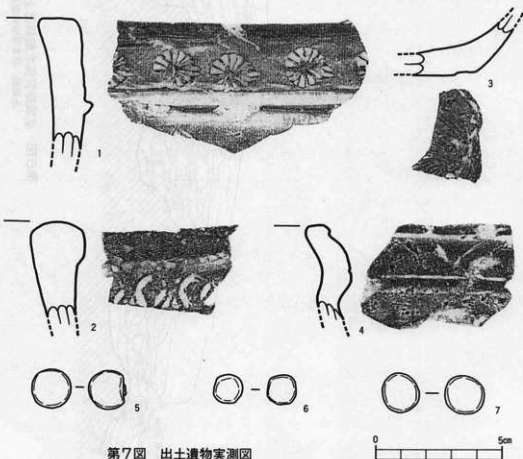
1は瓦質の火舎。断面三角形の突帯を一条はりつけ、口縁部との間に花文を刻印している。内外面とも灰色を呈し、胎土は細かい粒子でよくしまっており、焼成も良好。

2は土師質の火舎。口縁部は丸味を帯びており、口縁直下には文を刻印している。色調は口縁部が淡赤褐色、外面は灰色、内面は淡灰褐色を呈している。胎土は細かい粒子で非常によくしまっており、焼成も良好。

3は土師質土器。口縁部のすぐ下と胴部の変化点に浅い沈線一条ずつ巡らしている。内外面とも淡肌色を呈し、焼成・胎土とも良好。

4は土師質皿。胴部から底部にかけての破片であるため、大きさについては不明。内外面とも赤褐色で、焼成・胎土ともに良好。糸切り底。

5～7は鉛製の鉄砲玉。5は地表下約1mの地点から出土。一方が潰れており、径1.42～1.51cm、重量18.45g。6は地表下約4mから出土。径1.11～1.45cmとほぼ円形をしている。重量8.00g。今年出土したなかでは最も小型で、昨年出土した玉とほぼ同じ大きさである。7は地表下約5mから出土。径1.45～1.57cmとやや歪んでいる。重量19.60g。



第7図 出土遺物実測図

第Ⅲ章 ま と め

調査も4年目をむかえ、主郭・曲輪部分という平面的な調査から、空堀という立体的な調査へと変化した。空堀は主郭部を取り巻くように約300m巡らされており、今回はそのうちの約20mと非常に狭い範囲しか調査できなかったが、田中城築城における大土木工事をうかがうことのできるような大きな成果をあげることができた。

当初、堀の深さは2.5～3mぐらいだろうと思って調査を開始したが、なかなか底部まで達せず、とうとう表土から6mも下がってしまった。最終的に確認した堀の規模は南壁で幅9.42m、深さ4.63m、北壁で幅8.47+ α m、深さ4.42mである。比高差でいくと約80cmの差があり、北から南に傾斜している。堀の断面を観察してみると、いわゆる薬研堀で主郭側は約3m平坦面を設けて急激に落ち込み、物見やぐら側ではグラグラと傾斜したあと急激に落ち込んで底部にいたる。主郭側では南・北両壁断面とも約71°の傾斜をもち、物見やぐら側は北側で約63°、南側で60～72°の傾斜をもち、非常にきつい傾斜で作られている。底部幅は南壁で約80cm、北壁で約1.1mと非常に狭く、人ひとりやがと通れる程である。平坦部からは4基の土壇と1基の不明遺構が検出された。土壇は3基を調査したが、長径約3m、短径約1.5～2m、深さ約0.88～1.83mを測る。橋脚・望楼などの意見もでているが、柱痕跡は検出できておらず、どのような性質の遺構かは今後の研究を待たなければならない。類似遺構としては、熊本県文化課が調査した高城跡（球磨郡山江村）から検出されたものがあるが、高城跡の場合は平坦部ではなく斜面部に段々に作られており、遺構の性格については報告書で、「戦國的な施設と考える以外に用途を見いだせない」と述べてある。また、最近河内浦城（天草郡河浦町）でも同様の遺構が見つかったとの報道もあったし、今後検出例が増えることが予想される。

不明遺構は、直径約3.1mと大きく、深さ約3mで一旦平坦面を作り、堀底と上縁約80cm、下縁約10cmの細い溝状のものでつなげている。この遺構の性格についても今後の課題となりそうである。

堀の形成時期は、埋土の状態を観察してみると落城時に一気に埋め戻しているみたいであり、今回調査したような大規模な堀は、国衆一揆に加担し田中城に籠城した際に新たに掘り直したのではないかとと思われる。

また、田中城西側水田の圃場整備が行なわれる際に、県文化課が行なった試掘調査で和仁川の旧河道と思われる跡が確認され、これを自然の外堀として田中城との間を沼地化しさらに今回検出した大規模な空堀、約16mにもおよぶ急峻な斜面と何重にも巡らされた防脚跡が想定でき、守りが非常に堅固な城であったことが次第に明らかになってきた。

県営圃場整備事業（春富地区）の試掘調査概要

熊本県文化課文化財調査第1係長 松本健郎

県営圃場整備事業（春富地区）の平成元年度施工予定地が、県指定史跡・田中城跡の西側に隣接した地域であったことから、平成元年5月末に現地調査を行なった。現地調査は県文化課の松本健郎（文化財調査第1係長）・坂田和弘（文化財保護主事）が行い、町教育委員会の協力を受けた。

田中城跡の西側一帯は、和仁川に面した水田地帯である。ほぼ全筆にわたる遺物採集では、ごく少量の土師器が採集されたにすぎないが、和仁熊野座神社の下流で和仁川が不自然に流れを西に変え、施工予定地の水田の中に旧河道と思われる凹地の連続があることが判明した。

上記の現地調査をうけて、平成元年6月27日～7月5日に試掘調査を行った。試掘は、松本と坂本重義（文化課嘱託）が担当し、黒田裕司（三加和町教育委員会）の協力を受けた。試掘溝は重機により掘削し、遺構・遺物の有無等を確認した。

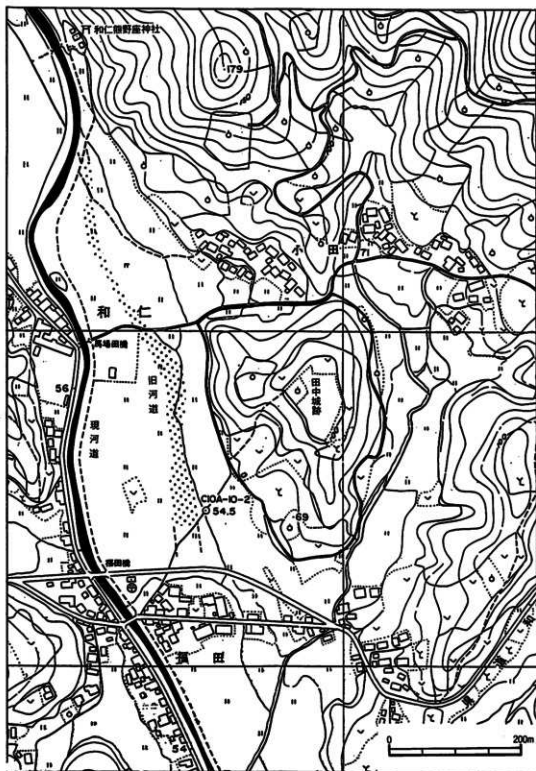
試掘調査を実施した一帯は、耕作土の下は砂礫層の部分がが多く、掘り進むにつれて周囲が崩壊し、湧水も多く、断面図等の記録作成は不可能であった。

19ヵ所に設定した試掘溝のうち、10ヵ所では何ら遺構・遺物は確認されなかったが、9ヵ所で遺構・遺物が確認された。なかでも、7ヵ所で旧河道が確認され、現地調査時の推定を裏付ける結果が得られた。

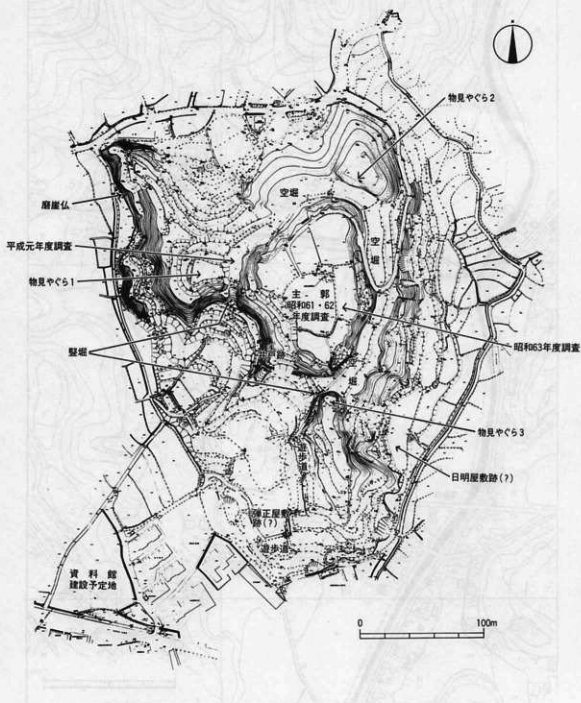
旧河道は、和仁熊野座神社下流の西側への曲流点からほぼ直線的に南に延びており、現河道より40～140m東側を流れている。田中城跡の西裾から現在の和仁川まで160～200mの距離があるが、旧河道までは40～70mの距離しかない。旧河道の川幅は、部分によって異なり、狭いところでは10m、広いところでは45m以上を測る。概して下流側が広がっている。深さは現地表から1.2～1.7mで、平均的には1.5mほどである。川底には泥炭層の堆積する部分があり、その中には木片を含む部分があった。

今回確認された旧河道は、田中城跡の外濠の役目をはたすもので、田中城跡の構造を考えるうえで、きわめて重要な意味をもつ。旧河道と城跡の西裾の間は大部分が湿地であったこと、城跡の西裾部の試掘溝から柱穴が今回の試掘で確認されている。これらを総合すると、最近話題になっている「迎春・和仁仕寄陣取図」（山口県立文書館蔵）もより一層理解しやすくなる。

現在の河道への改修がいつ行われたのかについての資料は不明であるが、周辺の水田化等に伴って近世以降に行われたであろうことは想像に難くない。



第8図 田中城跡と和仁川の河道



第9図 田中城全体図



(1) 空堀跡南側断面



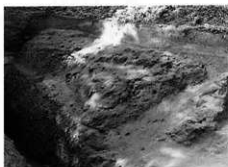
(2) 空堀跡北側断面



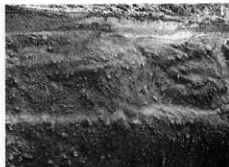
(1) 調査前 (南より)



(2) 発掘作業風景



(3) 空堀跡西側状況



(4) 空堀跡西側状況



(5) 土壌検出状況



(7) 3号土壇



(6) 土壇発掘後の状況



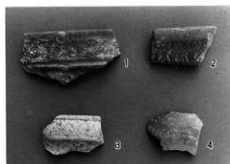
(8) 不明遺構



(1) 堀底検出状況
(南より)



(2) 堀底より南壁
(北より)



(3) 出土土器



(4) 鉄砲玉



(5) 南壁土層剥ぎ取り状況 (薬品塗り)



(6) 南壁土層剥ぎ取り状況 (ガーゼ張り)



(7) 南壁土層剥ぎ取り状況



(8) 南壁土層剥ぎ取り状況 (切り取り)

三加和町文化財調査報告 第4集

田 中 城 跡Ⅳ

—空堀跡調査の概要—

1990年3月31日

発 行 三 加 和 町 教 育 委 員 会

〒861-09

熊 本 県 玉 名 郡 三 加 和 町 板 橋 76

印 刷 鶴 城 野 印 刷 所

〒861-22

熊 本 県 上 益 城 郡 益 城 町 広 崎 1630-1 (産 業 団 地 内)